

社会福祉士による成年後見人活動における意識変容プロセス

ー独立型社会福祉士による活動に着目してー

○ 北星学園大学大学院社会福祉学研究科 小川 幸裕 (004625)

[キーワード] 独立型社会福祉士、成年後見人活動、意識変容

1. 研究目的

2000年施行の新たな成年後見制度は、①自己決定の尊重、②残存能力の活用、③ノーマライゼーションという現代的理念を勘案し、従来から行われてきた「本人の保護」の理念との調和を図った制度とされる。このような新たな考え方は、成年後見活動におけるソーシャルワーク実践の可能性を見出す根拠とされている。しかし、社会福祉士が成年後見人活動をとおしてソーシャルワークに関する意識をどのように変容させているかは検討されていない。そこで、本研究では社会福祉士の中でも成年後見受任件数が多い独立型社会福祉士に着目し、成年後見人活動における意識変容プロセスを提示することを目的とする。

2. 研究の視点および方法

調査協力者は、①調査時において法定後見を5件以上受任、②独立型社会福祉士としての活動年数が3年以上、③独立型社会福祉士の名簿登録者の要件を満たしている社会福祉士40名とした。インタビューは調査協力者の活動地域を訪問し事務所などで行った。インタビューは半構造化面接を用い、①独立までのプロセス、②現在の活動内容、③活動の課題、④今後の展望を中心にインタビューを行った。インタビューは、1回1時間半から2時間実施した。インタビューはすべてICレコーダーに録音し、録音したデータは逐語録に起こした。インタビューデータの分析は1行ずつ読みままとまりごとにコード化を行い概念の生成および定義づけを行った。また、作業効率を高めるために、質的データ分析ソフトMaxqda11を使用した。研究の質の担保のために、分析作業は調査者である筆者に加え質的研究法を理解している第三者との検討を行った。

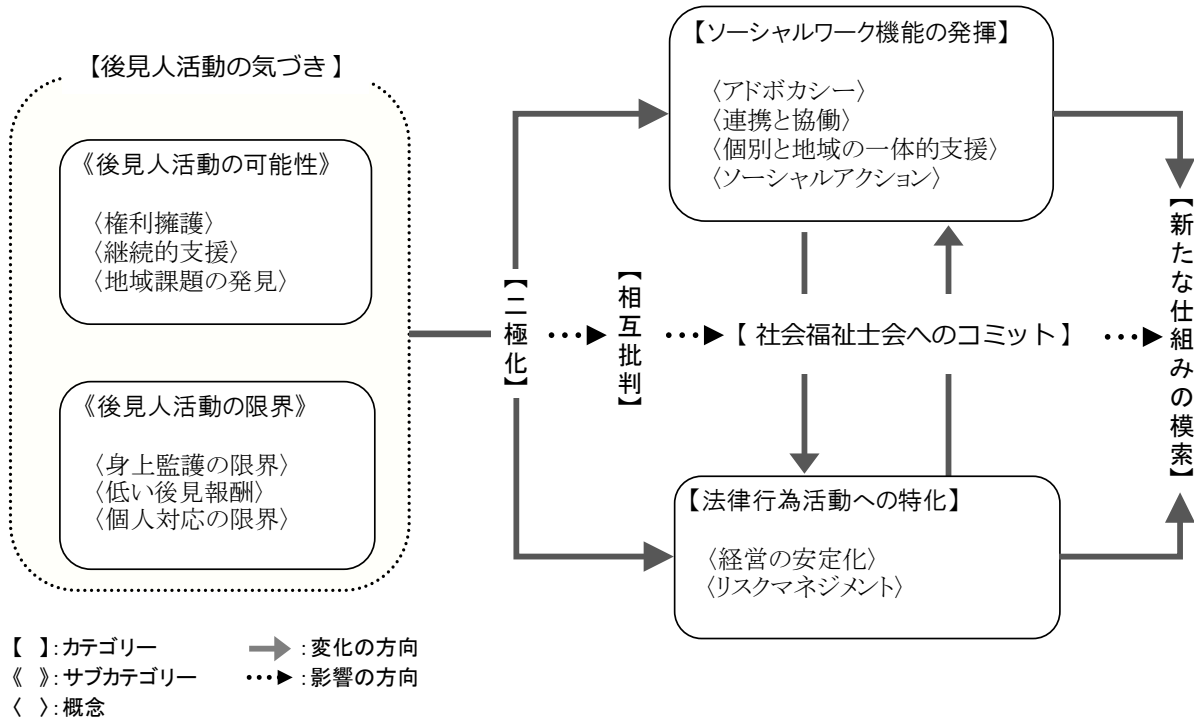
3. 倫理的配慮

本研究では、インタビューを依頼する際には調査の目的を伝えるとともに、事前にインタビューの依頼文書をはじめ質問項目やこれまでの調査結果などを送付し調査内容について確認をとり調査の承諾を得た。また、インタビューの際には、再度研究の目的および話せる範囲で構わないこと、プライバシーの厳守について伝え、データの扱い(録音・逐語記録・分析手順と方法・結果の公開・論文化)については文書および口頭で説明し、了解が得られた場合に承諾書に署名してもらいインタビューを開始した。

4. 研究結果

独立型社会福祉士による成年後見人活動における意識変容プロセスを検討した結果、全体関連図は図1となった。

図1 独立型社会福祉士による成年後見人活動における意識変容プロセス



5. 考察

本研究では、社会福祉士による成年後見人活動の意識変容プロセスとして、成年後見活動における可能性と限界の気づき、ソーシャルワーク機能の発揮と法律行為活動への特化の二極化、相互批判と社会福祉士会へのコミットによる新たな権利擁護の仕組みの模索を提示した。成年後見人活動におけるソーシャルワーク機能の発揮は、身上監護においてソーシャルワーク専門職の専門性の発揮を試みるものであると考えられる。しかし、成年後見制度におけるソーシャルワークの位置づけが未整理な中での上監護の拡大解釈は、事実行為の拡大や利益相反・利益誘導などの危険性を高める。一方、法律行為活動への特化は成年後見事務の範囲を遵守することでリスクマネジメントと安定的な後見報酬の確保を可能とするが、ソーシャルワークよりもビジネスの視点が強調される危険性を高める。今後、社会福祉士による成年後見人活動においては、成年後見制度を活用したソーシャルワーク実践と後見人としての法律行為活動を峻別した上で、成年後見制度におけるソーシャルワークの位置づけを検討することが必要である。

本研究は JSPS 科研費 25380760 の助成を受けたものである。